
あの日々までの道

sky

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの日々までの道

【Zコード】

N3172N

【作者名】

sky

【あらすじ】

工藤新一が黒の組織の手によって幼児化して半年・・・。FBIの手を借りて組織を潰した新一は、アポトキシンを手に入れ元の姿をとりもどす。

そしてついに、江戸川コナンの関係者たちに自分の正体をあかす。組織が潰れることにより、危険はなかつたため、

「工藤新一が幼児化していた」という事件は大ニュースとなつて全国に放送される。

・・・しかし、なんと組織には生き残った残党がいた！
はたして新一はみんなを守りぬけるのか？！

カツブリングは新×蘭です。 新一目線が主ですが、いろんな人か
らの目線で書くときも、もしかしたらあるかもです。

どうも。 ^{スカイ}skyoです！

コナン大好きです！！小説はコナンばかりかいていきます（笑
未熟者なので、むずかしい表現とかはあまり書けませんが、自分な
りにがんばって

書いていきます。

すきなカップリングは新×蘭です。新×蘭しか書かないのと、新×
蘭派の人おすすめです！

悪いところはどんどん指摘してもらいたいです。

もちろん、良いところも教えてくださると嬉しいです。

よろしくおねがいします。

今回の「あの日々までの道」は、新一が元の生活を取り戻すまでの
日々を

書いていきます。

哀 新一（コナン）のところが少しじでてくるかもです！

あくまでも、哀「 新一（コナン）ですがwww
できるかぎり投稿は早めにします。がんばります。

まつひこ（後書き）

「メンツまつてます^_^

期待と不安

- ・『確認終了です。残党はいません。どうぞ』
- ・『よし。お前たちはアジト周辺を捜索しろー。』

-『了解！』

俺の体が小さくなつて半年・・・。

キールこと水無怜奈からの連絡や、組織に関わつたある者が所持していた

証拠のフロッピーなどからの情報により、組織のアジトをつきとめた。

そしてFBIの協力でついに組織を潰し、今現在、俺と灰原と博士はFBIと共に

アジトにいた。

ちなみに学校や蘭、おっちゃん達には、

俺と灰原は博士と一緒に、親戚の葬式に出ていたと言つてある。

しかし、今はそんなことばりでもいい。

アジトから探し出さなければ……俺の体をこんなふうにした、あの薬を……

哀「……で、どうするつもり?」工藤君「

コナン「あん?」

哀「FBIが先に薬を見つけ出してしまつたら、きっと……」

コナン「ああ、持つてつちまうだらうな。重要な証拠品だから」

博士「セイジヤのオ。もしかすると検査なんかもされてしまうかもしれんの」

哀「その前に私たちが見つけ出すには、アジトの建物に入るしかないわよ。

あの建物は以前、私も組織の仲間だつたときに入つてゐるから、だいたい見当はついてるわ。」

コナン「だが、入口はすべてFBIが固めていて、建物も搜索しているFBIが大勢いる……か。

問題はどうやって潜入するかなんだよな。」

コナンは悩むようにボリボリと頭をかいた。

そんな中、哀は「クス・・・」と笑う。

「ナン」「あんだけよ? こんな大事な時に・・・」

哀「あら、さつき言つたわよね? わたしもへつたことがあるって・・・。

組織だつて馬鹿じゃないわ。隠し通路くらべ、一つや二つあるに
きまつてるでしょ?」

幸運にも、私もそれを知つてゐるのよ。」

「ナン」「本当か? ! 灰原!」

哀が言い終わるのとほぼ同時に、「ナン」は目を見開き哀に問いただす。

哀「ええ。でも、いつFBIが見つけ出してしまつかわからぬわ。
急ぐわよ」

「ナン」「おひー!」

博士「こ、これ哀君! 新一君!」

「ナン」「すまねえ! 博士はここで待つてくれ! なんかあつたら連絡するからよ!」

博士「わ、わかった・・・」

俺は灰原の案内で、FBIにみつからなによつに氣をつけた建物に入つた。

「ナン」「・・・で、お前の見当した場所ってどーなんだよ?」

哀「わたしが以前つかっていた研究室よ。

たぶん、ほかの薬なんかも一緒にあってあるから、みればわかると思つわ」

そういうながら、どんどん狭い通路を進んでいく。

「ナン」「あ、おーー、その研究室つけてござねえか?」

哀「ええ、そつよ。まちがいないわ。ここのがアポートキシンがあると思つ。」

研究室は意外と広く、ビーカーやフラスコなんかもたくさんあった。

幸い、FBIはまだこの場所に来ていなによつた。

哀「じゃあ、2手に分かれて探すわよ。」

「ナン」「ああ」

コナン「……ん? なんだこれ?」

それから15分ごろたつた時、俺は見覚えのある四角いケースを発見した。

コナン「こ……ここれはたしか……」

そう。これはたしかに、ジンが俺に薬を飲ませたときに、薬をこのケースにいれていたものだ。

俺は期待と不安が入り混じった気持ちで、ケースを開いた。

期待と不安（後書き）

さて・・・これはアポトキシンなのか？！
次はそれが明かされますよ^_^

ついに・・・

一方、博士の方では

博士「まだかのう。2人とも・・・」

ジョディ「あ！見つけたわ！」
阿笠博士「…………！」

博士「おおー、ジニアイ先生ー。」「へへ、じゅうたの木」

ジョディ「ええ。やつと目的が果たせたわ。

博士「あ、ああ……。二人はおなじいわよ、アハ……」

ジヨーティイ「・・・セウ。」

その時ジョーティは、怪しげな笑みを浮かべていた。・・・。

博士「え・・・？」

ジヨーティー「いえ。 無事を確認したかっただけよ。 じゃあ私はこれで」

そう言って走り去つて行った。

博士（今のジヨーティー先生なんかひつかかるのオ・・・）

- - - - -
『 A P T X 4 8 6 9 』

ケースの中に入っていた「それ」には、確かにそう書かれていた。

コナン「アポトキシン・・・4869・・・」

俺はしばらく何が起きたのか分からなかつたが、ハツとすりぬくとすぐ
に灰原をよんだ。

「ナン」「おー—————」 灰原—————」

哀「そんな大声ださなくとも聞こえるわよ。で、見つけたの？」
「ナン」「ああ……」のケースに入つてゐやつ・・・そつじやねえか
？」

哀「ええ、確かにアポトキシンよ。じゃあこれを早く・・・

「持つていかないと」と哀が言おうとしたとき、聞こ覚えのある明
るい声が聞こえてきた。

ジョディ「へイ……クールキッド！ 赤ずきんちやん！
」「んなどうで何してるんですか？」

哀「え・・・？」

「ナン」「ジョ……ジョディ先生！」

ジョディ「〇〇……ロボーは駄目ね……」のケース、持つていこ
うとしてたでしょ？」

ま、まづい・・・……今見つかつたら薬は……。
「つなつたら！」

「ナン」「ジョディ先生……たのむ……」これは俺たちにびびつしても必
要なものなんだ！」

わけは後で絶対話すからーーー！」

ジョーディ「・・・わかつたわ。そのかわり、絶対にわけをはなして
もらひつわよ。」

コナン「・・・ありがとうジョーディ先生」

俺達三人は、博士のところへ帰つて行つた。

ついに…。（後書き）

ついに見つけましたよアポートキシン！！
次回はどひなるやう…。

「ナン」「博士…………！」

博士「2人とも無事だつたんじゃなーよかつ……つて、ジョディイ先生?！」

博士は、さつき別れたばかりのジョディイがここにいることに、心底驚いていた。

それに、さつきのジョディイの様子が気になっていたこともあり、「まさか……」と思つていたのだ。

博士「おい……新一君。なんでジョディイ先生が……」

「ナン」「わりい、博士。見つかっちゃった……」

ジョディイ「クールキッドー！ 阿笠サン！ なにコソコソ話してゐるんですかー？」

俺と博士が小声で話していると、ジョディイ先生が割りこんできた。

「ナン・博士「あ、いや……」

ジョディイ「それよりクールキッドーさつきの「わけ」、話してください

コナン（げ・・・）うだつた。でも、どうせ話すなら、いざれみんなに話すとき

一緒に話した方が……

そんなことを俺が考えていると、灰原も同じことを考えたようだ……。

哀「それなら、いずれみんなにも話す時が来るから、そのときに聞いてちょうだい。

今知ったところだ、変わらないでしょ？」

ジョディ「……そうね。じゃあ、そうさせてもうつわ。

なんとなく分かる気もするけど」

俺にウインクしながらジョディ先生はそう言った。

「ナン」「はは……」

ひつひつして俺、灰原、博士は、博士の家へと向かった。

「ひじて（後書き）

なぜか会話文が多いです。
すいません（汗）

解毒剤

コナン「なあ灰原。その薬があれば、もう解毒剤は完璧につくれるんだよな?」

・・・俺たちは今、博士の車で帰っている途中だ。

哀「ええ。でも、今までの試作品より体にかかる負担は何倍もあると思うわ。

もしかしたら・・・

「ナン」「死ぬかもしねえんだろ?」

それでも、俺は飲むぜ。もう決めてんだ。あいつを悲しませねえって・・・

そうだ。たとえ死んだとしても、蘭の涙はもう見たかねえんだ。

そのためにも、解毒剤は飲まなければならぬ・・・。

博士「ところで新一君に哀君。

どうやつて「江戸川コナン」と「灰原哀」の存在を消すつもりなんじゃ?」

コナン「やうだな・・・。俺はとりあえず外国の両親の所へ帰るつてことで。

灰原、おまえは?」

哀「・・・わたし、元にはもうらないわ。」

「ナン・博士「え・・・?」

哀「考えてみたの。「富野志保」に戻つたところで、私の居場所なんてない。

「灰原哀」のままでいたほうが気楽だつて。

「のまま人生をやり直した方がいいつて・・・」

「ナン」「灰原・・・」

博士「哀君・・・。わしは哀君が決めたことなら反対せんよ。どつちを選んでも、哀君の居場所はわしがあるから・・・」

哀「博士・・・」

「ナン」「おれもそう思うぜ。」

灰原が楽しいとか、居心地がいいって思える方を選べば間違ひねえよ・・・」

哀「工藤君・・・。わたし、「灰原哀」として生きていくわ。

少年探偵団のみんなもいるし・・・。学校も好きだから

「ナン」「そつか。がんばれよ・・・。」

「今度は悔いがねえよう生きりよ」

哀「うん・・・。ありがと。博士、工藤君・・・」

空にはきれいな夕焼けが広がっていた。・・・。

- - -
博士の家

俺は「今日は博士の家に泊まる」と、蘭に電話で伝えた。

博士はキッチンで、俺たちのコーヒーをいれてくれている。

灰原はさっそく、アポトキシンのデータを調べていた。

「ナン」「解毒剤ができるまでどれくらいかかるんだ？」

哀「そうね。だいたい1ヶ月ってどこかしい？」

「ナン」「1ヶ月もあれば、俺の存在を消すにはちよほどいいな。
でも、いきなり「ナン」が消えて、「新一」が来たらおかしいよな」

博士「それならわしの家でかくまつておけばよからう。」

「ついでにながら、つまみの「コーヒー」を出してくれた。

「ナン」「ありがと、博士。」

「だけど、元太たちが博士の家に遊びに来たりしたら……」

博士「うへん……。それもそつじやのオ。」

「どこかに隠れても見つかってしまうかもしれんしな……」

哀「そうなつたら、私がインフルエンザで寝込んだことでもしてあげるわ。」

「それなら見舞いにもいられないだらつから」

「ナン」「やつか！ サンキュー灰原！」

俺は元に戻つたら、蘭と同じに行こうとか、なにを話そうとか

いろいろ考えすぎてまともに寝られなかつた。

元に戻つてからの悲劇を知る由もなく・・・。

解毒剤（後書き）

たぶんこれから、1日に何個もまとめて投稿する日が来ること思ってます。

テストとかの勉強がやばいので（汗

俺の存在

毛利探偵事務所

俺は、蘭とおっちゃんに、
外国にいる両親の所に帰ることになつた
ことを言つた。

3日後に、親が迎えにくると・・・。

おいかわさんは驚いた顔のまま動かない。

蘭は……備をヰニシと書きながら泣いていた

おおきな本

元は房へたゞまに先は会いに行くから……

数分後、泣きやんだ蘭が、

蘭一 じゃあ今田はナンくんの好きなもの作つてある！
ナンがーー？ ハンバーグ？

蘭「お父さん、ほゞほゞしてよー。」

「ナン」「あつがとつ・・・。蘭姉ちやん、おじわん・・・。」
聞き取れないぐらいの声で、俺はそつに言つた・・・。

元太「う、うそだろコナン?!」

光彦「コ、コナン君……」

歩美「そ……そんな……」

小林先生「コナン君からみんなにメッセージがあります。

「コナン君、お願ひね」

コナン「はい。僕は3日後、外国にいる両親のところへ帰ることになりました。

でも、この帝丹小学校にきて、とても楽しい日々を過ごすことができました。

みんなのおかげです。

短い間だったけど、ありがとう、みんな……」

クラス中に泣き声が響いていた……。

俺の存在は、こんなに大きかったんだ……。

俺は少しだけ、「江戸川コナン」を消すことがさみしかった。

楽しんで書いています！

別れ

・・・そして、別れの日がやってきた。

昨日、小学校では、クラスのみんながお別れ会をしてくれて、手紙やプレゼントをたくさんもらつた。

夜は、探偵事務所で探偵団のみんなも呼んでパーティをした。

今は・・・母さんが変装し、「江戸川文代」として俺を迎えてに来た。

文代（有希子）「じゃあ、コナンちゃん。みんなにお別れするわよ」

「ナン」「うん。じゃあね、みんな。いままでありがとう・・・。」

蘭「寂しくなつたらまた来てもいいからね・・・。」

コナン「ありがと。手紙とかも出すから」

元太「これからもみしくなるな・・・。」

光彦「そうですね・・・。」

歩美「歩美ね、コナン君のこと好きだよ！」

「ずっと言おうとしてたんだけど・・・なかなか言えなかつた。

これからも好きでいいかな・・・？」

「コナン、「ああ！ 言つてくれてありがとな、歩美ちゃん。

俺がいなくともお前らなら、探偵団としてやつていけるさー。
少年探偵団は不滅なんだろ？」

元太「おうー！ われがリーダーとして引っ張つて行くぜー！」

光彦「もちひんです！ 僕も知恵を働かせて頑張りますー！」

歩美「歩美も頑張るよー！」

蘭「ほらーお父さんも何か言つてー！」

小五郎「え・・・？！ えっと・・・その・・・。

まあ、あれだ！ いつでも戻つてこーー！」

「コナン「うん。 ありがとうーおじさん！」

「ありがとー！ みんな！ あ、それと・・・」

蘭「なあに？ コナン君？」

「コナン「みんなに話があるんだけど・・・。

もう少ししたらいざれ話すから、待つてて」

元太「でもお前、外国行くんじゃねえのかよ？」

コナン「ああ。でも、待つてくれ。今はこれしか言えない」

蘭「わかったわ。待つてる。元氣でねコナン君・・・」

コナン「うんー。」

「ひして俺は、母さんに連れられ、博士の家まで来た。」

有希子「じゃあ、新一をおねがいします」

博士「ああ。優作君もよろしくて、だされ

有希子「分かりました。じゃあね、新ちゃん」

「ナン」「じゃあな、母さん。また連絡するよ」

有希子「新ちゃん・・・」

コナン「大丈夫だつて！ 絶対死んだりしねえよ・・・。
俺にはまだ未練が多すぎるからな」

有希子「新ちゃんらしいわね。 優作にそつくりよ。

それじゃ、私は行くわ。新ちゃんも博士も、元氣で

これでみんなから俺の存在は消えた。

だが、まだ完全じゃない。

完全に消すには、元の体にもどらなければいけない・・・。

別れ（後書き）

うーん……。

なんかよくありそうなパターンになってしまってすいません。

元の体

あの日曜日の朝……。

哀「上藤君……」

コナン「ん……？」

俺は外に出られないから、ここに小説ばかり読んでいた。

今も博士に買つてしまつた推理小説を読みふけつていたところだ。

哀「プレゼントよ……。受け取つて」

コナン「なんだこれ？」

わたされたものは、小さな木箱だった。

哀「いいから開けてみて」

コナン「あ、ああ……」

戸惑いながらも開けてみた。すると俺は驚きのあまり動きが止まつた。

哀「上藤君？ 生きてるー？」

コナン「これってまさか……？」

哀「解毒剤よ。それも完璧のね・・・」

コナン「よっしゃーーー！ ありがとよ、灰原！
でもなんか早くねえか？」

哀「私をインフルエンザの設定にしたのは正解だつたよっね。
おかげで早く作ることができたわ」

コナン「俺の存在を消して2週間たつたし・・・。
もういいよな？」

哀「ええ。死なないでね・・・」工藤君

コナン「ああ！ わーてるつて！

なかなか俺から連絡がなかつたら来てくれよーーー。」

哀「わかつたわ」

俺は工藤邸へと急いだ。

「ナン、「よしー、H藤新一用の服も着たし、準備万端！」

「これで江戸川コナンともおやぢばだ……。

じゃあな、コナン……。

意を決して俺は飲んだ。

すると、たちまち体が熱くなつて、骨が溶けるような感覚になる。

ああ、いつもは苦しかつたけど……。

今は苦しこつてこりよりも、嬉しいの方が大きい。

そんなことを思いながら、俺の視界は闇におちていった……。

・・・・・・・・・・ん?

そつか、俺、氣を失つてたんだ・・・。

新一「あ・・・・」

少し声を出してみると、それは「江戸川コナン」のものではなかつた。

「工藤新一」のものだ。

時計を見る限り、氣を失つていたのは10分程度だ。

新一「灰原に電話すつか・・・」

・・・と、立ち上がる」とはできただが、歩く」とは少し難しい。

重い足を引きずつて、電話のところへ行つた。

新一「灰原か? どうやらもどれたらしく・・・」

哀「で、体調は?」

新一「おもつたよりも悪くねえ」

哀「そう。それで、これから蘭さんの所へ行くんでしょ?」

新一「ああ……。」

哀「本当は休んでろって言いたいんだけど……。
言つたつてどうせあなたのことだから、行くでしょう。
でも、無理はしないでね。」

前にも言つたけど、試作品の時よりも体に負担がかかってるの
よ。」

新一「悪いな灰原……。心配かけちまつて」

哀「もともと私のせいでこうなったんだから、当たり前でしょ?
あ、それと、言つておくけど、多分1週間は発作が何回かで
とおもづかわ」

新一「え?」

哀「それだけ負担がかかってるの。
戻ることはないから安心して。」

新一「わかった。本当のことは明日、みんなを俺の家にあつめて
言つつもりだ。」

江戸川コナンの関係者にな……。」

哀「わたしのことは、わたしから言つわ。
じゃあ、気をつけてね。無理しないで」

新一「ああ。サンキュー灰原……。」

電話を切り、すぐに蘭のところへ走った。

再会

探偵事務所までの道のりが、すこく長く感じた。

多分それは、熱や疲労のせいでフリフリしているからだひつねだい、それだけではない。

嬉しさと、不安のせいで。

蘭にこの姿で会える。しかも無制限で。

でも受け入れてくれるだろうか。ずっと待たせた俺を・・・。

何10分もかけてやっと着いた。

「ふう・・・」と深呼吸して、「ピンポーン」と呼び鈴を鳴らす。

今日は日曜日だから居るはずだ。

中から「は～い」と、会いたかった人の声が聞こえる。

がちゃ

新一「よ・・・よお蘭」

俺はどう対応していいか分からず、そつけなく言ひ。

蘭「新一・・・ほんとに新一？」

新一「ああ、ただいま。例の事件、片付いたんだ・・・」

蘭「新一・・・新一！ 新一！」

新一「え！ ちょ・・・／＼／＼

いきなり蘭に抱きつかれ、戸惑っていたが

新一「ありがとう。待っていてくれて・・・

と、言いたかったことを言えた。

その時、

小五郎「なんだあ？ 朝つぱらから……つて、おまえは探偵坊主！」

と、小五郎が出てきた。

新一「あ、ねじねこ」

小五郎「おこー！ 蘭とくつこてんじやねえよー。」

新一「あ、わるい蘭……」

離れよつとした時、蘭がいきなり俺の額に手をあてた。

蘭「やつぱつ……。新一、すいこ熱よー。」

新一「そ……やつか？」

蘭「早く横にならなきゃー入つてー。」

半ば強引に叫われ、しぶしぶ動いた。が、

ぐらり・・・・・と視界が揺れた。

新一「え・・・・・?」

蘭「新一・・・」

蘭の叫ぶ声が聞こえる。

ハツとすると、俺は小五郎の腕に支えられていた。

新一「あ、おじさん・・・」

小五郎「たく・・・。こんなで来るんじゃねえよ。」

新一「すこません・・・」

新一にはわかつていふ。こんな言葉も、小五郎の優しさだと。

新一はソファで横になり、小五郎が冷たくぬれたタオルを持ってくれ、

蘭がお粥と薬を用意してくれた。

蘭「それにしても、電話くらいくれてもよかつたのに」

新一「わりい・・・。すぐにでも会いたくてさ。
ずっと待たせつぱなしだったから」

小五郎「・・・で? なんでこんな熱を出したんだよ?」

新一「実は、俺・・・。みんなに話さなきゃいけない」とあるんです。

2人だけじゃなく、みんなに・・・」

蘭・小五郎「え?」

新一「明日、俺の家に来てください。

なにもかも話します・・・。

受け入れられるか分からなこと思つけど・・・」

小五郎「やついえば、コナンのやつもやんな」と呟つけてたな・・・

蘭「そうだつたね・・・」

新一「それに関係あるんです。だから明日、絶対に来てほしいんです。

蘭、学校は悪いけど休んでくれ。あと、園子もそれってほしいんだ。

それと、妃さんも・・・。」

蘭「わかったわ」

小五郎「まあ、明日になれば分かることなんだろ?」

お前はとつあえず休め

新一「はい・・・。」

明日にはみんなにすべてを話す。
どうやって話そうか。

そればかり考え、そして次の日になつた・・・。

再会（後書き）

「ああ———！
やつと蘭ちゃん会えたーよかつたーW

次の日・・・・・

俺の家に江戸川コナンの関係者をたくさんよんだ。

蘭、おつちやん、園子、妃、探偵団のみんな、警察関係者、服部、和葉、FBI、

などなど。

もちろん、灰原も博士もいる。

服部には、あらかじめ今からのこと話を聞いておいた。

よし、もつやうそいいだる。

新一「みなさん、お忙しい中お集まりいただきてありがとうございます」

ます「

蘭「新一・・・」

田畠「おおー！藤君ー・じつしたんだね？いきなり呼び出したりして・・・」

新一「今から、重要な話があります。

それを聞いてもらいたかったんです。」

元太「でも、なんで俺らまで呼びだしたんだよ？」

光彦「たしか、僕はコナン君の声で呼び出されたはずなんですが・・・」

・

歩美「歩美もそうだつたよー！」

新一「ごめん。それもいまから話すよ・・・。

まず、ここに集まつてもらつたのは、「江戸川コナン」の関係者なんです。」

田畠「た・・・たしかに・・・」

新一「そして、その「江戸川コナン」の正体は・・・

僕なんです・・・」

全員（哀、博士、服部 以外）「え・・・？！」

新一「これで、僕が今まで姿を現さなかつたわけがわかりましたよね？」

これは、僕が、蘭とトロピカルランドへ行つた時のことです。黒ずくめの男の取引現場を田撃してしまつた俺は、口封じに毒薬をのまれ、

田が覚めると、体がちぢんでいました・・・。

俺は最初に博士に相談しました。

『工藤新一が生きてこるとばれたら、また命を狙われるかもしれない』

と言われ、俺は正体を隠し、黒ずくめの男の正体を掴むため、探偵事務所に居候することになったんです・・・。』

蘭「で、でも学園祭の時、コナン君も新一も一緒にいたじゃない!」

和葉「やつこえばそつやつたわ・・・。びつこつことなん?」

新一「あのときのコナンは・・・灰原の変装だ」

蘭「うそ・・・」

哀「ほんとうよ・・・」

元太「灰原?...」

光彦「灰原さん?...」

歩美「あ、哀ちゃん?...」

哀「わたしも本当は小学生なんかじゃないのよ・・・。

わたしは彼のいう組織の元一員・・・。

それで、例の薬を作った張本人よ。

そして・・・彼の解毒剤を作ったのもこのわたし

歩美「そんな・・・。

でもどうして哀ちゃんまで小さくなってるの?」

哀「わたしも飲んだのよ。その薬を・・・。

死ぬつもりでね。

でも、幸運にも幼児化したってわけ。

死のうと思った理由は2つ・・・。

知らず知らずの間に毒薬を作らされ、組織が勝手に人に投与していたこと。

もう1つは・・・。姉を殺されたこと・・・」

元太「じゃ、じゃあ灰原は逮捕されちまうのかよ?」

光彦・歩美「え?」

蘭「警部・・・。どうなんですか?」

畠暮「うーむ・・・。難しいところだが、哀君は被害者でもある。

多分だいじょうぶだらう」

元太・光彦・歩美・蘭「よかつたー!」

新一「それで・・・。正体を知っていたのは、

博士、灰原、服部、俺の両親、一応キッド・・・」

和葉「え？！平次知つてたん？！」

服部「ああ。でも、工藤から相談されたわけとちやうで。

俺がおかしいなー思て、問い合わせたら、見事ビンゴやつた
ちゅうわけや」

中森警部「……て、キッドも知つてたのか？！」

新一「はい。なぜか知られてました……」

光彦「あの……それで、わざわざ言つていた」ナン君の声なんです
けど……
いつたこぢつやつて出していたんですね？」

新一「ああ、それは……これだよ」

俺は蝶ネクタイ型変声機をだした。

新一「これはどんな人の声でも出せるよつになつてんだ

博士「わしが新一君のためにつくつたんじやよ」

蘭「じゃあ、いつもの電話つて……」

新一「ああ、これをつかつてたんだ……」

小五郎「おまえ……まさか、いつも推理の途中で
変なところから俺の声が聞こえてくるのは……」

新一「それも、これをつかっていました」

小五郎「いつも眠くなつて、眠つてる間に事件が解決してるのも…」

「おまえが…」

新一「あ…いや…」

小五郎「いいんだよ。言つてもうつた方がありがたいからな」

新一「…それは、この腕時計型麻酔銃をつかつて眠らせていました」

歩美「これも博士がつべつたのね！」

新一「ああ」

高木「じゃあ、今までの『眠りの小五郎』は
君がやつてたんだね」

佐藤「てことは、園子ちゃんのもさうだつたつてわけね…」

新一「ええ…。以上が真実です。」

それと、解毒剤の副作用が1週間ほどでるそつで…。
みなさんには迷惑をかけるかもしれませんがお願ひします」

蘭「そつか…。それで昨日…」

新一「ああ、でもあれは戻つた時の影響なんだけど、

副作用はなんていうか……、発作みたいな感じになるんだ」

蘭「だ、大丈夫なの？」

新一「戻つたり死んだりしないから大丈夫だよ……」

歩美「……哀ちゃんは戻らないの？」

哀「ええ。うちのほうが氣に入つてゐから」

歩美「よかつたあ～」

新一「あ、ジョディ先生。

ジョディ先生もなんとなく知つてたんですね？」

ジョディ「ええ。でも、まさかあの工藤新一だとは思わなかつたわ」

新一「感謝しています。組織を潰せたのもあなたたちのおかげです
し」

田畠「まさかその組織つて、このまえ潰れたアジトの……」

新一「そのまさかです……」

田畠「そつだつたのか……」

園子「あんた、あれだけ蘭のそばにいて、
告白とかまだなわけ?」

唐突に聞かれ、おもわずせき込む。

新一「いはつ げはつ 。。。

な、なんだよ、きなり／＼／＼ げはつ」

園子「その様子じゃまだのよつね」

新一（んにやろ・・・・）

蘭「もーー園子・・・・／＼／＼」

小五郎「告白なんて俺がゆるさん!」

妃「まあまあ、あなた。」

新一君、蘭のことで、けつてやつてね

新一「はーー」

やつと正体をみんなにはなすことができた。
しかし、これがあらたな事件を巻き起こす・・・。

つ・・・つかれた・・・。

ピンボーン

蘭「新一？迎えに来たよー！」

新一『ああ！今行くから待つてくれー！』

ガチャリ・・・

蘭「ねえ、新一・・・。もう大丈夫なの？熱・・・。」

新一『ん・・・？』

蘭「昨日、正体をみんなに話した時・・・けつこう無理してたんで

しょ？」

新一「はは・・・。蘭には敵わねえな。

でも今日は大丈夫だよ」

蘭「ほんとにー？」

新一「ああ・・・。

ただ、副作用はいつでるか分かんねえけどな・・・」

蘭「気をつけてよ。もしなつたらすぐ言ってね」

新一「わーつてるよー！」

・・・つて言いながらも、心配させたくねえから分からねえんだけ
ど・・・。

丹高校校門前
- 帝

校門では、なにやら大勢の記者やカメラマンがザワザワしていた。

多分、俺のことだろうな・・・。

日暮警部が俺の正体を話しても大丈夫か、と聞いてきたから、

「もう組織は潰れたのでいいですよ」って言つたまつたから……。

記者たち「あ、工藤君ー君があの江戸川コナン君だったって、本当ですか？」

あ、そういうキッドの件なんかでも、コナンは有名だつたつけ。

新一「はい。また詳しいことは後ほど……。

今は授業に遅れるところませんので。蘭、行くぞ」

蘭「あ、ちよっと新一ー！」

記者たち「工藤君ーー！」

ガラフ・・・ーと、教室のドアを開ける。

やつと戻ってきたんだ。

この帝丹高校に・・・。

「クラスメイト」「あー、工藤！　おまえ、コースで書つてたことマジ
かよー。」

新一「まあ、本当なら薬を飲まれた時点で死んでたはずなんだからな。

生きてただけよが「たせ」

「クラスメイト」「そうだよなー!愛する毛利とも会えなくなっちゃうし！」

新一「ばつ／＼＼＼！なにが「愛する」だ！・」

蘭「そうよ／／／！　べつに夫婦でもなんでもないんだから！」

園子「まだそんなこと言つてゐるの？蘭。

卷之二

蘭「そ、園子ー！」

つたく、復帰早々これかよ・・・／／／

先が思いやられる。・。・。

クラスメイト「あ、工藤。体は大丈夫なのか?」

新一「ああ。1週間くらいは副作用がでるみてえだけど、

死ぬようなことはねえよ」

園子「まあ、そうなつたら蘭が看病してあげればいいことだしね！」

蘭「也~~~~~！」

やつと復帰した新一。

しかし、これからとんでもない事件が彼をおそつ・・・。

夜中なので、ねむいです・・・。

新一「ふあ～・・・」

蘭「ちょっと新一、ちゃんと授業受けなさいよ～！
今まで全然授業受けてなかつたんだから」

新一「ヘイヘイ・・・」

先生「・・・といつ」とから成り立つており・・・」

キ ンゴーンカーンゴーン・・・

先生「・・・じゅあ今日は！」今まで～！

しっかり復習しておけよー」

授業が終わったとたん、教室が一気にざわつく。

新一「やっと1時間目終了かよ・・・。

次、体育でサッカーだつたよな??

ラッキー!!

蘭「あ、でも・・・」

新一「心配ねえって!

灰原だつて、運動しても大丈夫だつて言つてたし

園子「ちょっと、2人とも!

もつみんな行つちゃつたよ!」

新一「マジ?!! ほら蘭、行くぞ!」

蘭「うん・・・」

新一「ゴール！」

クラスメイト「あいかわらずうめえな、工藤！」

新一「まあ、『ナン』になつてた時もサッカーやってたしな」

クラスメイト「工藤がいれば楽勝だぜーー！」

向ひでは、女子がさわぎながらサッカーをやつている。

クラスメイト「でも女子と別々なんて・・・。

これほど辛い使命があつていいのだろうか？ー」

新一「おまえなあ・・・。たかが体育だろ・・・」

クラスメイト「たかが体育、されど体育だ！」

新一「…………」

クラスメイト（…………ん？ どうしたんだ工藤のヤツ…………。
いつもなりもつヒツツ「むはずなんだけどな…………。

（）

新一（な、なんだ……？ 急に声が……）

…………と、その時…………！

……………ドックン！

新一「うう・・・ぐ・・・！」

クラスメイト「え？！　上藤？どうしたんだ？！」

クラスメイト「おい！大丈夫か？！」

や、やべえ・・・。来やがつた・・・。

蘭たちの方

園子「ねえ蘭・・・。

向こうにいる男子たち、なんか騒いでない？」

蘭「え？」

園子「・・・つてあれ、新一君じやない?」

蘭「し、新一！まさか・・・！」

蘭は考えるよりはやく、新一の方へ走っていた。

園子「あ、蘭！－待つてよ－！」

園子も続いて追いかける。

そのうちに、他の女子たちも新一の異変に気付き、駆けていく。

立ち上がりうごくするが、全然足に力が入らない。

くそ・・・・また心配させちまつ・・・。

1番前にいるのは・・・蘭だ。

少し顔をあげると、むこうから女子が駆けてくるのが見える。

みんなに迷惑かけちまうじゃねえか！

よりによつて学校で来るなんて・・・。

クラスメイト「今2人が先生呼びに行つてるから待つてろー。」

「救急車よんだほつが・・・」

「クラスメイト」ま、まじでやべえつて！

新一「はあ！はあ！・・・ぐ・・・あ・・・」

クラスメイト「おい！無理すんじゃねえよ！」

蘭「新一！ 大丈夫？！」

新一「あ……う……」

「大丈夫だ」と言いたいのに、声が出ない。

・・・そのうちに、先生と、呼びに行つてくれたクラスメイトが走つてきた。

先生「工藤！！ 病院に行くぞ！」

だめだ・・・。病院に行つたところで変わらない・・・。

これを処置できるのは灰原ぐらいだからな。

蘭「先生だめです！ 病院に行つても変わりません！
とりあえず新一を保健室に・・・」

先生「わ、わかった・・・。

じゃあみんな手伝ってくれ

やつぱりいい幼馴染をもつもんだ・・・。

ござつてときには助けになる。

新一「はあ・・・はあ・・・」

クラスメイト「もうちょっとだから頑張れ！」

新一「わ・・・わりー・・・」

やつと少し喋れるようになつた。

保健室につくと、蘭と園子、何人かのクラスメイトが看病してくれた。

俺からの頼みで、みんなには授業を続けてもらつた。

新一「おめえらも、2時間田の続きを受けたほうが・・・」

クラスメイト「なにいってんだ。

今はおまえの体の方が大事だろ?」

蘭「そうよ。少しは自分の体も大事にして!」

園子「そーゆう昔から無茶するとこ、変わらないわね」

新一「サンキュー……。ゴホッ…ゴホッ…」

蘭「大丈夫? 新一・・・」

そついいながら俺の背中をさすってくれた。

新一「ふう・・・。大丈夫だ・・・。

でも、これが1週間続くとなると、正直きついかな・・・」

園子「まあ、これにこりて、すぐに事件に首つっこむのやめなさい。
どれだけ蘭を心配させたら気がすむのよ、あんたは・・・」

新一「ああ・・・。」うなったのも俺の好奇心のせいなんだし

クラスメイト「それにしても、まだ信じらんねえよ。

工藤が幼児化してたなんて・・・」

新一「俺も最初は信じられなかつたよ。

まさか自分が小学生になるなんてな・・・」

蘭「『江戸川コナン』なんて、あんたネーミングセンスないわね・・・

・

新一「しゃーねえだろ?...あれしか思いつか...けほっけほっ!
！」

蘭「ほら、病人はちゃんと寝てなきゃ」

クラスメイト「じゃあ、俺ら3時間受けとけてくるわ。
終わったらまた来るからよ...」
しつかり寝てろよ?
「...」

やつひで、みんなは教室に戻つていった。

新一「はあ...」

まさか学校で来るなんてな...」

1週間の間、なるべく外出とかはひかえるか...。

さきほどの副作用で疲れがたまっていたのか、急に眠くなり、目を閉じた。

すると、すぐに眠ることができ、たちまち視界は暗転していった...。

熱

・・・・・ん？

ああ・・・いつのまにか寝てたのか。

時間的にもすぐ3時間目が終わる頃だな・・・。

新一「だり～・・・熱でもんのか？」

そつ思つて体温計ではかつてみた。

ピピッ

新一「げ・・・！39・2！まじかよ・・・。

副作用つてのは熱まで出んのか！」

なんて愚痴を言つてみると、

ガラフ！・・・と、みんなが3時間目を終えて来てくれた。

クラスメイト「よお、工藤！ もう起きて大丈夫なのか？」

新一「ああ。 でも今熱はかつたら39・2 だった・・・」

クラスメイト「さ、39・2 つて・・・
かなり高熱じゃねえか！」

新一「この副作用は熱も出るらしいな・・・」

蘭「早めに早退した方がいいんじゃない？」

新一「そうかもな・・・。またなつたらヤベーし。
そうさせてもう・・・」

・・・その時頭痛と眩暈を感じ、思わずベットに手をつぐ。

新一「いって～・・・」

クラスメイト「ほんとに大丈夫かよ・・・」

蘭「あんまりううじかない方がいいね・・・。

下校時間になる頃にはお父さん帰つて来てるから、
迎えにきてもらおつか

新一「わるじけだ、やつせせてもらひへ・・・」

蘭「じゃあ、お父さんこメールしとくね」

クラスメイト「お前はそれまで」で休んじけ」

新一「ああ・・・」

- - - - - そして下校時間 - - - - -

蘭「新一～！ お父さん來たから帰ろ～！」

新
—
「ん
・
・
・
?」

蘭 あ、寝てた?
ごめんね大声出して・・・」

新別にいいよ。じゃ、帰るか。

蘭 ひとりで歩かる？」

新——大丈夫 · · ·

小五郎「……お、来た」

新一「すいません。。。わざわざ。。。」

小五郎「しょうがねえだろ。

そんな状態のお前をほつておけるわけねえんだしよー！」

新一「ありがとうございます・・・」

蘭「じゃあ、今日は私が看病するから、家に泊まつていって！」

新一「え・・・？」

そこまでは聞いてないぞ。・・・。

蘭「じゃあ新一、とりあえず熱はかって

そいつで体温計をわたされた。

・・・・・ペペッジ

新一「・・・壊れてんじゃねえか? 」
「れ・・・」

蘭「え? なんで?」

新一「だつて、どう考へてもおかしいだろー。
40・1 なんて・・・」

蘭「ふ、40・1?」

小五郎「なに騒いでんだ?」

小五郎が車を止め終わって、帰ってきた。

蘭「新一、熱が40・1も・・・」

小五郎「おいおい・・・。

そりや、病院行つた方がいいだろ」

蘭「・・・解毒剤の副作用なんて処置できる医者いないわよ」

小五郎「そりやそうか・・・」

新一 灰原も、こればっかりは仕方がないって……」

蘭「でも心配ないわ！」

私が少しかり看病して治してあるから！」

新一「蘭」

新一・蘭・小五郎「え・・・?」

突然、新一の携帯が部屋に鳴り響いた。

新一「はい。工藤新一ですが・・・」

日暮『おお！ 工藤君！ 今どこに居るのかね？
家に居なかつたよつなんだが・・・』

新一「あ、はい。今はちょっと毛利探偵事務所に・・・」

日暮『そつだつたのか！ それだつたらちよつどいい！
毛利君にも電話しようと思つていたんだよ』

・・・そつだつた。 日暮警部たちには今日の事言つてなかつたっ
け。

新一「・・・事件ですか？」

日暮『1丁目で殺人事件があつたんだよ。

今から毛利君と来られるかね？』

行きたいのは山々だけど、蘭が許してくれるかどうか……。

・・・・・。

ゼってー無理だな……。ま、聞くだけ聞いてみるか。

新一「あ、ちょっと待つてください。田畠警部……。
……つてなわけで、蘭。行つてもいいか?」

蘭「だ、だめに決まつてるでしょー!」

新一「……だよな……」

予想どうりだ……。

小五郎「……俺も行くんだから、たいしたことねーだろ」

蘭「なにしてんのよお父さん!」

新一は~~は~~安静にしていないといけないんだから!」

新一「……すぐ戻つてくるから……ダメか……?」

蘭「もー。事件と聞いちゃ飛んでっちゃうんだから……。
……じゃあ、時間制限は夕食ができるまで!」

過ぎたら戻つてきてもらひからね」

新一「え……? いこのか?」

蘭「どうせ、事件と聞いて黙つてゐるなんつてできないんでしょ？」

まあ、お父さんもつじていいく事だし・・・。

でも無理しないでね」

新一「サンキュー……蘭……」

俺は、田畠警部に行へりとを知り、おひやを共に田畠へと向かつた。

今日は少なめで「めんなさい」（汗）

skのからのアンケート！！

突然すいません！ アンケートです

こんなことしてる暇があつたら、 続きかけよ・・・って感じです
が（汗）

でも、なんとなくアンケートをしてみたくなりまして。

では、さつそく1問！

Q1 気に入っている映画は？

skはですねー。今回の「天空の難破船」です！！

キッドにいい感じ盗られてしまい、すこしコナンがかわいそうでした
がww

殺人無しだったので、推理もあまりなかつたです（笑）

ま、そこは許してあげて・・・。

でも、ギャグシーンいっぱいでラブコメもいっぱい？ 楽しかつた
です！

Q2 パナンとコラボしたらおもしろい的なマンガは？

ルパン三世とかとコラボしてましたよね？ あれ、おもしろくてよかったです。w

「めぐりあう2人の名探偵」っていう、金田一とコラボしたゲームがあるんですが

ストーリーがおもしろかったのでアニメ化希望！！！ です

なんかよく、「ハヤテの」「」と「」でパナンの銅像がある気が・・・。

・・・なんなんでしょう、あれww

Q3 組織のボスは誰だと思つ？

sk yは阿笠博士があやしいんですが・・・。

作者がそれは否定してゐらしゃるので・・・。

でも実際、アガサ・カクテルって酒ありますーー！

しかもジン&ウォッカで作れますーー！

工藤優作がボスって説もありますけど・・・笑

みなさんは誰だと思いますか？

この3つの問い合わせてください^_^

おねがいします

車の中

新一「あの・・・おじさん・・・」

小五郎 一
ん?
なんだ?

新一 田暮警部たちには今田の事、言わないでもらえますか・・・?

小五郎……なんでだよ？」

新 一 その・・・心配かけたくないですし・・・
絶対 「帰つて休んでろ」って言われちゃいますから・・・

小五郎「そりやせうだらうな。

でもお前のその頼みを聞く」とほりきねえ

新一「え・・・？」

小五郎「これで無理して、また蘭に心配かけさせてみろ?
こんどは容赦しねえからな」

・・・・・おひやんの三ツ山だつた。

蘭にこれ以上心配はかけさせないようになさると……。

新一「……そうですよね。

僕も蘭には、もう心配かけさせたくないですし……」

小五郎「もし警部殿に帰れって言われたら
俺が適当に何か言つてやるからよ」

新一「はい……わかりました……。

あと、1つ聞きたいんですけど……」

これは大体予想はつくが……。

小五郎「なんだよ」

新一「蘭に心配かけさせたくないなら、
なんで「お前はここで寝てる」って言わずに
連れて来てくれたんですか?」

小五郎「蘭と2人きりになるなんて、この俺が許さねえからだ」

や、やつぱりな……。

事件現場

小五郎「田暮警部殿――――――！」

田暮「おお、毛利君に工藤君！」

すまないな、わざわざ来てもらひつて・・・」

新一「いえ・・・。

でも、僕はもう少ししたら帰らないといけませんが・・・」

田暮「え？ なにか用事でもあるのかね？」

小五郎「いや、こいつちょっと熱がありましてね。蘭が夕食までには帰つてこいつて・・・」

佐藤「それって、例の薬の副作用なの？」

田畠警部のほかにも、佐藤刑事や高木刑事も来ているようだ。

新一「ええ、まあ・・・」

高木「大丈夫なのかい？」

それだつたら帰つて寝ていた方が・・・」

小五郎「こいつがどうじても行きたいって聞かないんだよ」

それはそうだが・・・。おひひちゃん、あんたも連れてきただろ・・・。

田畠「熱はどのくらいなのかね？」

警部が心配そうにたずねてきた。

新一「あ、いや・・・。

一応さつきは40・1で・・・」

田畠・佐藤・高木「よ・・・40・1?!

新一「でも、そんなにキツくないんで・・・。
心配いりませんよ」

佐藤「へ、上藤君……？ せつこつ問題じゃなくて……」

高木「君がいつまで普通に歩いているのも不思議なくらいだよ……」

「

新一「ほんとに大丈夫ですから。

静かに調査しますし……」

田畠「しかたない……。

じゃあ君はなるべく安静にしてるんだよ、いいね？」

新一「はー……」

・・・その頃蘭は、黙々と夕食を作っていた・・・。

心配（後書き）

もうすぐ夏休みがおわってしまつ……（泣
いやだ~~~~~ 31日までです

夏休みって嫌いですね……、
。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3172n/>

あの日々までの道

2010年10月8日22時27分発行